

聖光 第四号第七号

楽聖

英雄

十八世紀の末、ヨーロッパは歴史上不朽の名を残した蓋世の大英雄を生みました。コルシカの一孤島より現われてフランス革命の風雲に乗じて、戦いに戦いをつづけて、ついにフランス皇帝の位にのぼり、英・露二国を除いては、全ヨーロッパをその勢力下に降伏せしめた、ナポレオン・ボナパルトがそれです。

何たる華々しさぞ、その兵を用ふる神の如く、その向う所、ほとんど敵なしの様であります。

「不能という字は唯、愚人の辞書にあり。」の一語が彼の有名な格言であることは、小学生だつて知っています。

イタリア何ものぞ、ドイツ何ものぞ、「余をさまたぐるアルプスあらんや」

彼は誠に蓋世の大英雄であります。しかし、私どもは静かに考えざるを得ません。

彼ナポレオンがいたために我らは何を与えられたであろうか。彼ははたして何を後世に残したであろうか、ということですよ。

地図の色が一時変つたということ以外に今日の我らに何を彼が残したでしょうか。

英雄ナポレオンが現われたその時代に、ヨーロッパは又全く別の意味における精神的英雄を生みました。

楽聖ベートーベンがそれです。

ルードヴィヒ・ファン・ベートーベンは西歴一千七百七十年十二月十六日、ドイツのライン河畔のボン市に生れました。

彼の父も亦音楽家でありましたが、生来酒を好んで、家庭は常に修まりません。

その頃オーストリヤにも大音楽家がありました。モーツァルトがそれです。彼は三才の時から音楽を習いました。五才の時、モーツァルトの父が外出先から帰つて見ると、彼は楽器の前に坐つて五線紙の上にペンを走らせています。それは既に立派な曲でありました。六才の時には、彼は父や姉の一行に加えて演奏旅行に出ました。大きなピアノの前に坐つて紅葉のような手で、大曲をひきこなす手腕は、聴衆をアツと言わせました。

ベートーベンの父も亦モーツァルトの例にならない、四才の時すでに、ヴァイオリンやピアノ等を教えはじめました。彼の父が、ベートーベンを神童に育て上げるのは、それによつて自分の物質的欲望を満たしたためでありました。

彼の父の教育は誠に厳格なものでありました。彼の家庭の訪問者はしばしば幼いベートーベンが父の咎しとのために、鍵盤の上に涙を流している姿を見たといいます。

何にせよ一芸を修得するだけでも、幾度か人知れず涙するほどの努力がいります。

今頃のように気分本位で、我儘勝手の通る軟弱な世界に何が生まれましょう。実に幼き日、甘やかされて通つた坊ちゃん育ちに、人物が出ないのは当然でなければなりません。

ベートーベンは十二三才の時すでに立派な演奏者になつていました。十七才の時には、ウィーンを訪れて、先輩モーツアルトの面前で立派な演奏ぶりを見せて、多大の称讃を博しました。彼は二十二才の時、故郷ボンを棄て、ウィーンを永住の地に定めて移りました。

政治家や実業家や軍人等の仕事は極めて社会的に派手であり、華やかであるに對して、芸術家・宗教家・思想家の一生は地味であり、寂しいものであります。

古来から全人類に大きな恩恵を与え、力を与えたほどの大思想家は、その時代では決して彼に適當であるほどの報いを受けておりません。報いどころか、全人類の心霊に、生活に、大きなものを残したが故に殺され罪せられた人すら多いではありませんか。

ベートーベンの芸術は彼の生前にももちろん認められていました。しかしナポレオンの坐している英雄としての地位よりも、ベートーベンの楽聖としての聖座を上位につけ、彼の偉大さをナポレオン以上と賞めたならば、その時代の人々は何と言つたでしょうか。私どもは今、ベートーベン先生に深い尊敬を捧げつつ、たつた一篇のシンホニーですが、ナポレオンの欧州征服よりも偉大であることをたたえずにはいられません。彼の作品は人類の精神生活の上に大きな光を与えます。

芸術は決して時代の流れだけでは生れません。もしベートーベンがなかつたならば永久に、あの雄大な「第三シンホニー」や「第九シンホニー」は生れなかつたであらうでしょう。仏像などについてもその感じを持ちます。近代の作品は、軽快であり、上手であるかも知れません。しかし古い、いい彫刻のような何となく頭の下る崇高さと、ノミだけでは作られない神秘な高い香がありません。ベートーベンの名曲は唯ベートーベンにだけ作られます。

ナポレオンの名は忘れられても、ベートーベンは永久に生きるでしょう。

我らはいと小さい存在かも知れない。

しかし私でなくては出来ない仕事がある。

我らは名もなきいと小さき花かも知れない。

しかし私でなければ持たない香がある。

忠実に生きようではないか。

真剣に努力しようではないか。

百合は百合であることによつて大自然を代表し、

薔薇はバラであることによつて大自然を莊嚴する。

美しい魂

ベートーベンの音実は偉大であります。しかし彼は音楽家として偉大であるばかりではなかつた。彼は実に、まず人間として偉大でありました。彼には人生に對する深い深い苦悶があつた。その苦悶が彼の魂を磨き、彼の心を培つた。

彼は苦悶に切磋された美しい魂の持主であつた。

これを書きつつも、ペンを持った私の眼は熱くなる。

おゝ愛する兄弟よ！ 姉妹よ！ おん身たちも私と共に苦悩を持つ。我らは勇士であらねばならない。そうして勝利者であらねばならない。苦悩によつて起つ能わざる者もいるかも知れない。しかし苦悶なくして光つた天才も聖者賢人もいない。

忍

寒さいよいよ厳しうして麦作豊かに、暑さいよいよ厳しうして稲豊かに稔る。

忍は地上に生きる者の道の本質である。忍は、ただ奮闘であり、努力である。

フローベル曰く「天才とは忍耐なり」と。

忍なくして徳あれば、正宗の名刀が鑄型で出来る。

ベートーベンは、磨かれた美しい魂の持ち主であつた。彼の音契はこの美しい英雄の心から生れた。

モーツアルトの音楽が、音の音楽であり、感覚の芸術であるならば、ベートーベンの音楽は、美しい魂の表徴であつた。人格の芸術であつた。

月光の曲

私は皆様と一緒にナシヨナル・リーダー巻五の「月光の曲」を読んで行きました。それはベートーベンがまだボンボンの街にいた頃であつた。ある冬の月夜に彼は彼の友人と共に散歩していたが、ある暗い狭い街に通りかかると、彼は突然足を止めた。

「おい君、あれを聴きたまえ、あれは俺の作つた曲だ。如何にも立派にひいている。」

それは小さい汚い家の前であつた二人は立止つて耳をかたむけた。ピアノの音は更に続いてゆく。しかし曲の終りに近づいた時、音はハタとやんだ。そうしてすすり泣きの声が聞える。

「私にはとても弾けません。何という美しい曲でしょう。私がこれを弾くことはこの曲を汚すようなものです。ああ、私は一度コロンの音楽会に行つてみたい。」

それはやさしい女の声である。すると別の男の声が聞える。

「妹よ嘆いても仕方がないじゃないか。家賃さえ払えない我々の身の上なのだ。」

「それは兄様のお言葉通りですね。けれど生きている間に一度だけよい音楽が聞きたいものです。」

「しかしそんなことは諦めたがよいよ、出来ないことなのだから。」

それを聞いたベートーベンベートーベンは友人をかへりみて言つた。

「内へ入つて見ようじゃないか。」

「何、内へ入る。何のために入るのだ。」

「私は彼女に弾いて聞かせたいのだ。彼女は美しい感情と天才と智慧との三つを具へている。私が弾いて聞かせたらすぐに悟るだろうよ。」

ベートーベンベートーベンは感激した調子で言つた。そうして突然戸を開いて内に入った。

顔色の悪い若者は机の側に坐つて靴を作つており、黄金色の美しい髪がふさくと顔にたれた娘は古いピアノに愁しそうにもたれかかっている。兩人とも清潔さっぱりとしては

いるが粗末な衣服をまとっている。彼らが入って来たので、ビックリして入口の方にふりむいた。

「甚だ失礼ですが、ピアノを聞きまして誘われてはいつて来ました。ごめん下さい。私は音楽家です。」

女の子は赤面し、若者は真面目になった。少し困った風さえ見えた。

「私は今、あなた方の話を聞きました。私に一曲弾かせて下さい。いいでしょう。」
いかにも急な出来事であったが、ベートーベンの無邪気さのために皆な思はず微笑した。

「有難うございます。しかし私たちのピアノは大変粗末で御座います。それに楽譜も御座いません。」

「楽譜がない?」

見れば娘は可愛そうに盲である。

「そうですか。これは気がつきませんでした。それではあなたは、耳だけで覚えたのですか。しかし音楽会に行きなさいのでしたら、どこで聞かれたのですか。」

「私共は二年間ブルにいましたが、そこにいます間、近所の婦人が毎日稽古していなさるのを聞きました。夏の夕方などその方の窓は大概開かれていますので、私は歌を聞こうと思つていつも外を行きつもどりつしていました。」

内気な娘は恥かしそうにあつたので、ベートーベンは、黙つてピアノの前に坐つて弾き始めた。

彼の手が一度ピアノの上におかれて弾きはじめるや、彼の友人は驚いてしまった。数年間、今夜のやうに冴えた弾奏を聞いたことがなかつたからである。

ああ、あの音色よ! 彼は全く別人のようになった。神来の興、胸に充つるが如く、異常な感激が流れ出でる。兄弟は驚きの耳をそばだてた。静かなる沈黙。兄の手からは靴がおちた。ピアノの側に坐つた娘の両手は、心臓の鼓動さえがこの幻妙艶美の流音を破りはしないかと、しつかとその胸にあてられている。

あゝ我らは今、不可思議な夢を見ているのではあるまいか!

その時だつた。一陣の寒風がさつと吹いて燈を消してしまつた。ベートーベンは弾く手をやめた。友人は雨戸を明けた。皓々たる月の光はピアノと弾手とを照した。

しかしベートーベンは生命の流れを断たれた者の如く、その頭をひくく垂れ、両手をしつかと膝の上ののせて動かさず、深く、思索に沈める者の如くであつた。

ついに若者はたまりかねて起ち上り、熱心なそして敬虔な態度で近づいて、低い声で言つた。

「驚くべき方よ! いったいあなたはどなたでござりますか。」

「まあ、お聞き下さい。」

と言いつつ、彼はへ調の曲の始めの小節を弾きはじめた。すると彼らははじめて狂せんばかりの歓びに思わず

「それでは、あなたはベートーベン先生ですか。」と涙しつつかんだ。

彼は立上り去らんとしたが、請われるままに再び楽器の前に腰かけた。

皓々たる月光は窓より差し込み、蓬々たる髪と大きなその体を照した。彼は沈黙を続けつつ、天を仰ぎ見ていたが、

「この月を題して一曲を……」

と言いつつ彼は又も弾きはじめた。

悲哀にして幽婉なる音が、あたかも月の光が幽に大地の上を照すが如く鳴りはじめた。清く静かに凄く……響くかと思うと、それはやがて、三拍子の荒々しい乱曲に、あたかも妖精の庭の芝生に狂うが如き奇怪なる調べと変った。やがて来る快速なる急奏は、あるいは迫るが如く、迫うが如く、暗い／＼谷底につれてゆかれるかと思えば、あるいは大きな翼にのせられて霞の彼方につれゆかれるが如く、あるいは悲しみ、あるいは怖れ、具さに変幻の妙を極めて快速の調べはおわってしまった。聴者たちはただ感動し驚愕して我を忘れた。

椅子を後にもどし、戸の方に向きながら彼は「さよなら」と言った。二人は声を揃えて

「あなたはまたお出で下さいますか。」

彼は立ちどまって盲の少女の顔を見た。彼は彼女を不憫に思い、可愛いと思つた風である。

「ええまた来て教えてあげます。さよなら……」

兩人はただ黙つて……言葉以上の雄弁なる沈黙をもつて……二人が見えなくなるまで見送つた。

「忘れない中に楽譜にしたいから……」と言つて彼は急いで帰つたが、彼は徹夜してそれを書いた。これが不朽の名声を博した「月光の曲」の由来である。

耳の疾患

もし音楽家が耳が聞えなくなり、画家が盲目となり、職工に手がなくなつたらどうでしょう。しかも不幸なるベートーベンに、それが来たのです。まだ三十才にならないうベートーベンにこのおそろしい難聴と耳鳴りがおそつて来ました。千八百二十年には野外において農夫の吹く笛の音が聞えないことを見出して、悲観のあまり弟にあって、遺言としての手紙を送つたといひます。

ともすれば常軌を逸しやすい天才的な彼は、このためにますますその悩みは深刻となり、憂鬱となります。この悩みが作品の上に出ない道理はありません。英雄ナポレオンの記念のために作られたという第三シンフォニー、運命と人生との葛藤を描いたという第五シンフォニーから第八に至るまでの作品、バルトシュタインその他の有名なソナタはいづれもその時代に作られたのであります。

彼は自然に対して深い愛を持ちました。終日林をさまよひ、野にさまよつて想をねるのが常でありました。田園を躰された第六シンフォニーは、彼の自然に対する愛の表徴であります。自然に対する愛、人生に対する愛、その愛が彼の尊い芸術を生んだのであります。芸術に対する敬虔なる奉仕者たる彼は、苦悩の中に尊い愛の人格を作りあげました。

晩年のベートーベンは苦悩を超越した偉大なる精神的英雄でありました。第九シンフォニー等はほとんど聴力を失った時の作であります。そこには高雅な輝きと一切を超越した力のひらめきが光っています。

一八二七年三月二十六日、彼は第十シンフォニーのスケッチを残したきりで、完成をも見ないで、ウィーンにおいて長い眠りに入りました。もう再び立つことが出来ないと知った時、彼は「私はやっと音符を少しばかり書いたばかりだ。」と言ったそうであります。

ああ、偉大なる人格の所有者、崇高なる芸術の天才は、不朽の名曲幾十を地上に残して逝きました。

「いのちは短く、芸術は永し。」彼の楽聖としての地位は永久に地上から消えないであらう。